

## AA 研共同利用・共同研究課題

### 「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

#### 平成 25 年度第 1 回研究会(通算第 7 回目)

日時: 平成 25 年 5 月 11 日(土) 午後 1 時～午後 6 時

場所: AA 研 302 小会議室

#### ■研究会プログラム

【報告 1】 櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 育英短期大学)

「〈美しい過去〉をめぐる言説

—マレー半島の華人のコピティアムと故郷をめぐる集合的記憶」

【報告 2】 横田祥子 (AA 研共同研究員, 滋賀県立大学)

「地方選挙におけるチャイニーズネスをめぐるポリティクス

—2012 年インドネシア西カリマンタン州シンカワン市市長選挙」

#### 総合討論

平成 25 年度第 1 回研究会(通算第 7 回目)として、2 名の共同研究員が過年度報告した内容をブラッシュアップして再報告を行った。これをもって全共同研究員が、話題提供(初年度目)と、本共同研究会の趣旨に沿ったブラッシュアップ報告(2 年度目)を全て終えたことになる。

第 1 報告では櫻田が、個人の記憶をデータベース的に集積することでシンガポールの集合的記憶を構築しようとするプロジェクトに働く論理を確認した上で、マレー半島の華人文化と密接な関わりがあるとされるコーヒーショップ「コピティアム (kopitiam)」が、ノスタルジックな感覚を喚起しつつ商業的に展開している様を捉え、まさしくノスタルジックの感覚を媒介に立ち現れる対象としての何某かの過去そのものが、構築される局面を検討した (⇒「報告 1」の要旨を参照)。

第 2 報告では横田が、歴史的に華人系住民がマレー系やダヤク系住民と混住するインドネシア共和国西カリマンタン州シンカワン市に焦点を当てた。同地では、ポスト・スハルト期になって、インドネシア初となる華人系の市長の下で、前記 3 エスニック・グループが調和を保って共存するという表象が各方面で積極的になされていたが、横田はそうした背景を確認した上で、2012 年に行われた市長選の過程では、現実には多様な要素や思惑が働く

選挙戦が、エスニック・ポリティクスに基づくものとして現実味を帯びるに至ったことを示した(⇒「報告2」の要旨を参照)。

今回の発表はいずれも、初年度中に既発表の内容をブラッシュアップさせたものであり、データ・議論ともに質の高い発表となった。個別議論を超えた本共同研究会共通の方法論についても、積極的な議論が交わされた。この方法論については、通算第1回目の研究会で櫻田が「行為中心のアプローチ」を詳しく紹介しているが、津田が改めて解題という形で、当該方法論について解説と提起を行った。

「華人性」を持った「華人」を所与の前提とし、彼らの行動を描き出した上で、結論として「やはり彼らは華人的であった、華人性を持っていた」などと論じるトートロジックな議論構成に、本共同研究会は批判的かつ反省的な立場を取っている。こうした本質主義的循環論は主要には、個別事例やフィールドで得たデータを、何らかの総体理解のために還元・抽象化・一般化した際に生じる。一般に、具体的な現場での行為や現象局面を何らかの大きな物語に回収する際には、通時性と共時性における還元・抽象化・一般化の力が働く。こうした大きな物語に回収された個別・具体的な事象は、言うまでもなく、単なる全体の中の一事例として理解され、それゆえ大きな物語の「穴埋め」へとなり下がり、そのことにより当該個別事例は結果として、何かしらの「民族」の実体性・本質性を補強してしまうことになる。

このような、ある事象を時間・空間的に抽象化・一般化して捉える思考(=「民族イデオロギー」)を解体し、またそうした思考に伴う論理的落とし穴に自ら陥らないために、試みに一見安定的・実体的に見える概念を、流動的・刹那的な概念に置き換えることが、方法論的手掛かりとして有用であるように思われる。すなわち、時間(通時性・歴史・系譜)の問題を「記憶」に、そして空間(共時性・集団・分布)の問題を「想像」へと読み替えることにより、現場でどのような行為者がどのように行為するを通してどのようなことが立ち現れるかというダイナミックなあり様の記述が可能になるのである。別の概念を用いて言い換えるならば、現象として観察されたり語られたりする「華人」(シニフィアン)は、必ずしもシニフィエとしての「華人」を要請はしない。シニフィエとしての「華人」が実定上存在し、外的な表象であるところのシニフィアンをシニフィエと区別せず語るのが、本質主義的立場であるのだとすれば、我々がとるべき記述は、個別の現場や現象局面でどのようなシニフィアンが運用され構築され語られているのかに着目し、その現場や現象局面に留まったまま、そのシニフィアンが本来意味しているシニフィエ(具体的な行為、人物、事柄などであって、「華人」では決してない)を微細に明らかにすることであるだろう。

以上の方法論に関しては、全ての共同研究員が十全に理解し全面的に合意したわけでは必ずしもないが、「華人」ないしそれに類した概念が立ち現れる個々の現場で、この方法論を基にした記述がどこまで可能か、これから各共同研究員がそれぞれの事例の執筆を進める中で検討していくことが確認された。

今回報告を行った2名の報告者の発表要旨と主な議論内容については、以下を参照されたい。

## ■「報告 1」の要旨

### 「〈美しい過去〉をめぐる言説

#### —マレー半島の華人とコピティアムと故郷をめぐる集合的記憶」

櫻田涼子 (AA 研共同研究員, 育英短期大学)

本報告は、平成 24 年度第 1 回研究会における報告、「甘いかおりと美しい記憶—マレーシア華人のコピティアムをめぐるノスタルジアについて」で提示したデータや議論をさらに整理したものである。

報告では、まず中国海南島出身者と結びつけられマレー半島の華人文化として語られてきたコーヒーショップ、「コピティアム (kopitiam)」が、民族集団の垣根を越えた飲食空間になりつつある現況を概説した。その上で、コピティアムをめぐり語られ、表象され、消費されるノスタルジアあるいは懐かしさといった〈過去〉に対する感情一般が喚起されるとき、いったいどのような〈過去〉が想起されているのかを明らかにし、そこから、文化を切り貼りしてパッケージ化し読み替えていくプロセスに立ち上がる華人文化なるものの考察を試みた。

考察の手がかりとしたのは、シンガポールの映画監督らが 2011 年に制作したドキュメンタリー映画『老地方・Old Places』においてシンガポール人が語る「失われつつある何かの記憶と結びついた特別な場所」の語りと、シンガポール国立図書館が実施する「シンガポール・メモリー・プロジェクト (SMP)」である。SMP はシンガポール人の個人的な思い出／記憶を収集し、ウェブでの公開を目的とするもので、現時点で約 18 万件の投稿が確認されている。このような個人的経験にもとづく記憶であっても、語り、共有し、集積することによってシンガポールの集合的記憶へととなっていく仕掛け、つまり文脈から切り離された〈懐かしさ〉や〈過去〉が想起される局面が SMP からは示された。

報告後の質疑応答では、個人の語りが集積されてつくられる集合的記憶についての議論は、単一の視点から描かれる国史とは対極に位置づけられるものであり、このような下から紡がれるナショナル・ヒストリーについて丁寧に考察する必要があることが指摘された。また、ノスタルジーを操作し、商業的にイメージを利用するコピティアムについてはもう少し批判的に検証する必要があることも指摘された。一方、行為中心的アプローチから華人というカテゴリーの解体を試みる本共同研究の射程のひとつが、当事者である人びとの〈語り〉であることが改めて確認された。

## ■「報告 2」の要旨

### 「地方選挙におけるチャイニーズネスをめぐるポリティクス

#### —2012年インドネシア西カリマンタン州シンカワン市市長選挙を事例に—

横田祥子 (AA 研共同研究員, 滋賀県立大学)

本研究会の目的「今日主に東・東南アジアの各地で、ある一群の人々がどのように『華人であること』を生き、またどのような広がりでもって彼らなりの『華人世界』を思い描き、新たな関係性を構築しようとしているかを、多角的に明らかにすること」、および研究手法「行為中心のアプローチ」に従い、本発表ではシンカワン市一帯の中国系住民、および中国系移民が、国際結婚あるいは海外出稼ぎといった移住および経済活動、選挙などの政治活動を通じて、どのようなトランスナショナル／ローカルな社会空間を形成しているのかについて報告することを目的とした。

トランスナショナルな社会空間の形成に関して、シンカワン市一帯では、1970年代末以降、海外にネットワークを持つ中国系住民が、現地中国系女性を台湾、香港、マレーシアなどの中国系男性に斡旋する国際結婚が開始した。国際結婚を機に海外移住した女性は、一説には4万人以上とも言われている。こうした女性たちは、シンカワン市に住む出身家族の経済と福祉を支える一方、移住先社会で再生産を担っている。また、国際結婚移住の増加に伴い、台湾、香港、マレーシアなどへの非合法の海外出稼ぎも開始した。今日、シンカワン市一帯の中国系住民にとって、祖先の出身地・広東省との連絡は途絶える一方で、台湾、香港、マレーシアは家族、親族が新たな関係性を築き、一時的に滞在・労働する可能性のある活動範囲に入っている。

一方、「華人であること」を生きるローカルな社会空間に関して、2012年9月に行われたシンカワン市長選挙の事例を取り上げた。元市長ハッサン・カルマン氏は、インドネシア初の中国系市長であった。しかし当選後、中国系住民の政治参加に脅威を覚えたイスラム系政治団体が龍をモチーフにした柱の破壊予告を行ったり、以前執筆した論文がムラユ人の名誉を傷つけたと謝罪を要求される事件が起きたことで、そのコンフリクト・マネージメント力が問題視されるようになった。また華人文化の大々的な表出が、他のエスニック・グループや中央政府から「愛国心の欠如」と見做されるのではないかという懸念が、中国系住民の間にも広がった。こうした背景に加え、選挙活動資金を提供するジャカルタ在住の企業家の利権が絡まり、2012年の選挙では他の中国系候補が擁立された。結果、イスラム系前市長のアワン氏が返り咲いたところ、その結果を受け入れられない中国系住民が、中国系の対立候補と主要支持者を集団的に呪詛するといった行動に出た。市長選挙キャンペーンは、エスニック・ポリティクスにのっとなって行われたものの、その調和に配慮したものであった。また、実際の住民の選挙行動は、エスニック・グループの帰属、宗教、政治的信条に帰結できない複雑なものであった。以上、結婚や出稼ぎといった再生産、経済活動の個人、および集団的行為を通じたトランスナショナル社会空間の形成と、ローカルな社会空間の

政治的局面で顕著になったチャイニーズネスの表出について報告を行った。

(文責: 横田)